花は孔明が震えているのに気づき、背中に回した腕に力を込めた。
どんな手を使っても帰さないと言いつつ、そのすぐ後で放せないと言ってくれた。ずっと想っていたとも言ってくれた。そばにいて欲しいとも。
それはきっと、今まで決して見せることのなかった孔明の本心だ。
師匠も混乱しているのだと思う。こんな表情も、立てない姿も初めて見た。
こんな風になっているのに、この人は、それでもまだ、自分の想いが足かせになるのなら冗談だと思っていいと言ってしまうのだ。
洛陽で亮くんと別れてから、師匠にとって一体どれだけの月日が流れたのだろう。
ずっとずっと、待っていてくれた。
花も想いが溢れ出す。
「好きです」
花はもう一度繰り返した。
口にして、初めてこの言葉を言いたかったのだと気づいた。
「うん」
今度は孔明が抱きしめ返してくれる。
孔明の肩越しに建物の屋根が見える。現代の日本とは違う、中華風の建物。
空は夕焼けで朱色だ。とてもとてもきれいな夕焼けだ。
よかった。そう思った。何に感謝をすればよいのだろう。
孔明のそばにいることが出来る。
私のためにこんな風になってしまう人を残して、帰ってしまわなくて、本当によかった。
「師匠……」
ふと、思う。
「師匠、私の気持ちを知ってましたよね。私が師匠を好きだってこと」
「……うん」
孔明には珍しく返事に時間がかかった。
「どうしてですか?」
疑問を口にして、自分が怒っているのだと気づいた。
とてもとても、腹が立っている。
「それなのに、どうして勝手に帰そうとしたんですか?何の相談もなしに勝手に決めないでください」
言っているうちに、ますます怒りがエスカレートしていくのを感じた。
高ぶる感情のまま、花は大声をあげた。
「それに、勝手に私の部屋に入って、勝手にあの本を持ち出して!　勝手に帰そうとしてっ……!」
花は孔明の背中に回した腕に力を込めた。
「……ボクは君の師匠だからね。君を導くのがボクの役目だって、君が言ったんだよ。最後まで、君が好きなお師匠さまでいることが、ボクにとっては君に唯一してあげられ

ることだったんだ」
「……」
そんなのずるい。そんな風に言われて、いつまでも怒っていられない。
耳元で聞こえるやさしい低い声に視界が涙でにじんでいく。
「君を君がいた世界に帰してあげたかった。幸せになって欲しかったんだ」
花を抱きしめる腕は強くて、少し苦しいほどだったけれど、放して欲しいとは思わなかった。
もう、放さないで欲しい。放したくない。
視界に映る赤い夕焼け空がにじんだ。
「……私の気持ちを無視して、勝手に決めないでください」
「ごめん」
「私は、師匠のそばにいたい、です」
「うん」
花の瞳からは涙が溢れだしていた。
でも孔明に抱きしめられていて、拭うことが出来ない。
代わりに花はぎゅっと目を閉じて、孔明の肩に顔を押し当てた。
これから、ずっと、この人とのそばで生きていく。
どうか、もう二度と、放さないで――。

＊

その日、孔明が一日外出で不在だと知った芙蓉が「休憩しましょう」と手作りの点心を持ってきてくれた。
花も孔明からもらった、とっておきのお茶を淹れる。
ここしばらく仕事でバタバタしていて、芙蓉とこうしてのんびりおしゃべりできるのは久しぶりだ。
「あなた、最近忙しそうだけれど大丈夫？」
「うん、仕事すっごく楽しいよ」
花はにっこりと笑ってうなずいた。
とても仕事が楽しい。少しぐらい仕事が忙しくて身体が疲れても、それすら楽しいと思えてしまう。とても充実していた。
それはきっと、花がきちんと自分の気持ちに区切りをつけたからだと思う。
この世界に残って、もっともっと勉強して、師匠の役に立ちたい。
以前だって手を抜いていたつもりはないのだけれど、モチベーションが全然違う。
それに大好きで尊敬している人がいて、しかもその人も花のことを好きだと言ってくれて、そんな人が目の前にいるのだ。仕事だって楽しいに決まっている。
けれど芙蓉の認識は違ったらしい。
「あなたたち、本当に恋人同士になったのよね」
「うん」
花はこくりと頷いた。
「でも、そんな風に見えないわよ。ちゃんと孔明殿に大切